

月の花挽歌 ～7. 時の過ぎ行くままに～

7.時の過ぎ行くままに

7-1

横田がスペインの画家フランシスコ・デ・ゴヤに捧げるオマージュのつもりで描いた裸婦画の二作品は、今のところ画商の朝倉さえ知らされていなかった。

秘密裏に裸婦画を描いた横田の心情は当人にしか分からないが、完成後も越前和紙の里のI氏を除き黙して語らない訳を真紀にも打ち明けてくれなかった。

初々しさの内に裸婦を超えた何かがあると予感させられた作品を前にして、真紀の引き出しの中にあったストックの一端を共鳴させることで、自我以外との対話を享受することができただけでも、横田には感謝していた。

けれども、危なげな線上にいる二人の関係には、横田と真紀だからこそ発生しうる危険なリスクが介在した。

セックスで未知のオーガズムを得られたとしても、それが上質であればあるほど、心的要因でスローダウンさせられると、性の回復は人知の及ぶところではなくなってしまいうのが真紀独自の性癖だった。

越前から戻って以来、真紀は横田の同衾の誘いに乗ってこなくなった。

横田は自身の女性遍歴からでは手に負えない真紀の反応に動揺を隠しきれないでいた。

電話では埒が明かなかったので、帝国ホテルのバーへ誘ったり、『こはる』へ行く頻度を増したりして、あれこれと思い巡らせては策を弄したものの、一向に良くならないばかりか、オールドインペリアルバーでの待ち合わせもままならないまでになっていた。

「理由を言ってくれ」の一言が思わず口をついて出そうになるが、さすがに横田も、そこまで男を下げることはできなかった。

12月に入ってから、横田は足繁く『こはる』に来店するようになった。

朝倉と伴ってくることもあったが、一人で来ることがほとんどだったので、年末の書き入れ時の店としては、招かれざる客であったし、朝倉へのツケ払いになっていた。

横田の席にはヒデコがつくことが多かったので、「ママを呼んでくれないか」と催促されても、「ごめんなさい。もう少しお待ちください……」と座を取りなすしかなかった。

恋に憂き身をやつすテイの横田ではあったが、『こはる』のボックス席でひとり気を揉んでいたとしても、その風貌や存在感は芸術家然としていた。

月の花挽歌 ～7. 時の過ぎ行くままに～

7-2

アズ・タイム・ゴーズ・バイ
作詞／作曲 ハーマン・フップフェルド
歌手／ドーリー・ウイルソン

このことをぜひ思い出しておくれ。
キスはキスで、
溜息は溜息。
基本的なことは同じ……時が過ぎても。
そして恋人たちが愛し合えば、今でも
「愛している」という……
君もそうすればいい、
将来何が起きようとも……
時が過ぎても。

「今晚は」と真紀。
「やあ、」と横田。
ヒデコは風のように席を外す。
「シャンパンを……」
「ご無理なさらしないで。ジントニックのおかわりを頼みましょう」と真紀は横田の様子をみながら言った。
「私も地に落ちたものだ。しかし、そう言わせてしまうのも、私のせいか……」と横田は奥行きのない目をして自問自答した。
「ごめんなさい。すぐにシャンパンをお持ちします」
「……、ありがとう。それでは、凄腕の女性バーテンダーにシャンパン・カクテルを二杯作ってもらおうことでお相子としようじゃないか」と横田は浮かれ口調で言った。
「マティーニをいただいてよろしいですか」
真紀は半ば意図的に聞くと、横田の返事を待たずに黒服を呼んだ。
真紀が自分の店でマティーニを頼むのも飲むのも初めてだった。
バーテンダーの菜々緒が作るマティーニと行きつけのバーの老バーテンダーが作るマティーニを飲み分ける機会を持たせてくれたのも横田のお陰だと思えば、年の暮れの多忙な時期に物分かりの悪い男を前にしてまで、店の隅々まで神経を尖らせて俯瞰的に見ている真紀ではあったが、なぜか自然と口元がほころんだ。
カウンター席は立て込んでいたので、黒服に頼んでも構わなかったが、菜々緒はカクテルをトレイに乗せて運んできた。
「ママがマティーニを飲まれるなんて、意外でした。エクストラ・ドライで作りましたけれど……」と菜々緒は心配そうに言ってカクテルグラスとシャンパングラスをテーブルに置いた。
「私のも、緊張感を持って作ってくださるだろうね？」と横田がふざけた顔で言った。
二人の危なっかしい空気を感じ取った菜々緒は、ニコリともしないで黙って頷いた。

月の花挽歌 ～7. 時の過ぎ行くままに～

7-3

時の過ぎ行くままに

作詞／阿久悠 作曲／大野克夫

歌手／沢田研二

※歌詞は5番迄の内の1番と2番

あなたはすっかり つかれてしまい
生きてることさえ いやだと泣いた
こわれたピアノで 思い出の歌
片手でひいては ためいきついた

時の過ぎゆくままに この身をまかせ
男と女が ただよいながら
墮ちてゆくのも しあわせだよと
二人つめたい からだ合わせる

いかにも慣例的にグラスを合わせた男と女は、それぞれのカクテルに口をつけた。

二杯ともレベル以上の出来栄えだったけれど、バーテンダーの菜々緒が気転を利かしたつもりで施したレモンツイスト（1cm×2cm程度のひし形に切ったレモンの果皮を軽くひとひねりする）の微香とミクロの果皮油は、マティーニに限って言えば、飲み手の嗜好に大きくかかわってくる。

真紀好みのマティーニはベースのジンにドライベルモットを数ダッシュ混ぜるだけの処方方で、雑味のない洗練されたドライ・ジン特有の研ぎ澄まされた味わいが求められた。

真紀にしてみるとレモンツイストは邪魔であったが、角砂糖やビターズを使うシャンパン・カクテルには有効だった。

映画『カサブランカ』の主人公の経営する酒場で、主人公の恋敵ともいえる反ナチ運動の地下組織のリーダーがバーテンダーにシャンパン・カクテルを頼む場面があったり、主人公がバーボン・ウイスキーをストレートで飲む別の場面があったりするのを観ると、愛飲する酒類によって、登場人物の背景や個性を表す小道具として使っていると思われる節がある。

マティーニを飲まずにいられなかった真紀とは対照的に、仕方なくシャンパン・カクテルを飲む羽目になった横田は、本来の自分らしさを見失っていた。

真紀は接客中に極力酒を控えるようにしていたけれど、アルコールにめっぽう強い体質のせいもあって、飲み過ぎたとしても乱れることはなかった。

マティーニを飲み干した真紀は、無理をしてシャンパン・カクテルを飲んでいる男に苛立ちを覚えていた。

「終わりにしませんか」

「……」

「二人の関係です」

月の花挽歌 ～7. 時の過ぎ行くままに～

7-4

女から別れの言葉を言われた経験値のない横田は、想定内のはずであったにもかかわらず、いざ直面してみると時間が止まってしまっているような気がしていた。

人一倍自尊心の高い男の根底が揺れ動いていた。

今日は確か、12月8日の金曜日。昼間に少し雨が降ったけれど、すぐに止んでいたはずだと、横田は現状とは無関係なことを連想することで瓦解しそうになる自分を、どうにか支えていた。

気持ちが意識のエアポケットに落下してゆくと、真紀は時と場所さえ置き忘れて、男に引導を渡していた。まもなく引き潮のごとく足早に空白が埋められてゆくと、真紀の眼前に蒼白な顔の横田がフェードインした。

「改めてご連絡させていただきますので、今日のところはお帰りになってください」と真紀はつとめて穏やかに言った。

「見くびるな！」と横田は押し殺した声で言うが早いカクテルの残りを、真紀の顔を目掛けて振りかけた。

カクテルのわずかな残量は、真紀の唇と着物の衿合わせにかかった。

真紀は咄嗟の出来事に怯んだけれど、痴話喧嘩ごときで、『こはる』の名に泥を塗るような茶番だけは避けなければと言う強い思いが脳裏をよぎったので、「私が悪うございました。お詫びと言うのもなんですが、お店からシャンパンをサービスさせていただきます」と袂から取り出したハンカチで口元を押えながら詫び言を述べた。

「すまなかった。悪いのは私の方だから、気持ちだけ受け取らせて……」と恥じ入る気持ちにかられた横田は語尾をにごらせた。

二人の席の近くにいた客やホステスは、妙な気配を感じていたが、飲み物を振りかけた場面を見てしまったのは、ヒデコともう一人のホステスだけだった。

他の席に移った時から、嫌な予感がしていたせいもあって、接客しいしい垣間見ていた視線の先で、凶らずも衝撃的な事象を目撃してしまったヒデコは、同席のお客に疑念を抱かせるのを覚悟で、即座に左手を挙げて黒服を呼んだ。

ヒデコに耳打ちされた黒服は、すばやく真紀の席に動いた。

事が治まりかけているときに黒服がやってきて、真紀に暗黙の指示を仰ぐので、黒服の気持ちを察した真紀は横田に悟られないように何食わぬ顔で、「シャンパンをお願いします」と黒服に頼んだ。

月の花挽歌 ～7. 時の過ぎ行くままに～

7-5

シナリオのト書きモドキにすれば、酒場で相対する男女が険悪な状況下で、女が飲んでい
た酒の中身をいきなり男の顔にぶっかけてしまうワンシーンにも似た行為を逆バージョン
で演じてしまった横田は、台本に指示でもあるかのように、狼狽を露わにして真紀の次のセ
リフを待っていた。

ウェイターの黒服と入れ違いに地味な私服姿のマネージャーが足早にやってくると、真
紀の耳元に用件を告げた。

「よろしければTさんと同席していただけますか？」と真紀はおもむろに、ほぼ満席の店
内で六人掛けの席を占拠している横田に同意を得ようとして尋ねた。

「Tさん？」と不意の申し出に横田は怪訝な面持ちで反復した。

「ヨ～、横田君じゃないか」とマネージャーの動向を探って目ざとく認めた大御所俳優のT
は、これ幸いとばかりに声掛けすると有無を言わず真紀の隣に座った。

「お二人とも、こちらに」とTは言って、映画ファンに限らず誰もが知っている長身の二枚
目中年男優と脱ぎっぷりの良さで評判の三十代のサラブレッド女優に着席を促した。

回り舞台での場面転換のごとき状況変化に動揺を隠せないでいる横田は、了承の意向を
作り笑いで誤魔化すしかなかった。

「失礼いたします」と特徴ある声音で断ってから、隣にファーッと腰かけた女優の佇まいに
気圧された横田は、上目づかいに真紀を見ながら腰を浮かせて「どうぞ……」とどことなく
平坦な口ぶりで言った。

男優は無表情な顔で、185cm余りの姿態を折るようにして女優の隣に座った。

名立たる役者が三名いても、『こはる』の空気感はザワツクこともなく、いつも通りの表
情を見せていた。

Tは二人の俳優は紹介するまでもないとばかりに、真紀と横田の生業を明かした。

「飲み物はコニャックでいいかな？」

Tの行きつけのイタリアンレストランで食事をしてきたので、食後酒には丁度いいと決
めたTは二人の好みも聞かずに、ボトルキープしてある『マーテルコルドンブルー』を勧め
た。

二人とも酒は好きだったので、飲みたいものはあったけれど、取りあえずブランデーも悪
くはないと思い領いた。

注文を終えた大御所俳優は、気忙しい師走に一人きりで来店している画家に浮評も含め
て嫌味のひとつでも言いたいのを抑えて、映画のことを話し始めた。

月の花挽歌 ～7. 時の過ぎ行くままに～

7-6

「二人が主演の映画に脇で出させてもらってね。今回が初めて一緒の仕事だったので、飯でも食べようかと話していたんだが、九月の終わりにクランクアップしたのに、今頃になって約束が果たせたってことさ」とTは言ってからコニャックの水割りを口に運んだ。

男優と横田は水割りを、女優と真紀はストレートで飲んだ。

真紀の話の進め方もあって、自ずと三人が出演した官能恋愛映画が話題になった。

「今年の春に私が初監督した映画が公開されたことはママも知っているよね」とTは真紀に言ってから、横田にも同意を促した。

高名な日本画家だった父を持つTの妻が絵画を購入してくれた縁で、時おり横田はTと飲食を共にするようになったが、映画界には疎い方なので相槌を打つことが精々だった。

「最近では監督を兼ねる俳優も多くなってきたが、いざやってみると大変は大変だけれども、作品が完成した時の充足感はたまらないね」とTは初監督作品の評価もまざまざだったこともあり満足げに言った。

「何と申しましても血筋ですから……」と真紀はTの祖父が日本映画の草分け的な監督だったことを念頭に相槌を打つ。

仕事関連の話には食傷気味だったけれど、このような形態の店は初体験の女優は、周りからの視線を感じないで寛げる『こはる』の雰囲気、一流クラブと呼ばれる格付けの一端を右脳で察知することで解消していた。

男優は真紀に興味をそそられたようで、上の空でTと対峙しているのが透けて見えた。

場の空気を百も承知のTは、それでもアフターディナーに場所替えしたことをいいことにして映画の話が続けた。

「実は映画作りの勉強がてらに、今度の映画のオールラッシュを観させてもらったんだ」

「オール何とかって、業界用語でおっしゃられても……」と真紀は直ぐに説明を求める。

「オールラッシュとは、撮影後のフィルムを台本通りに編集した試写会の事なんだ。主に製作スタッフが最終チェックする場で、出演者はまず観ることはないね」

「出来映えはいかがでしたでしょうか」と今の話が初耳だったこともあり、Tの評価が気になった女優はブランデーグラスを手のひらで揺らしながら尋ねた。

「あの作家の本が原作だから……、ま、あんなもんだろう。でもねー、濡れ場は良く撮れていたよ！」とTは先ほどまでの映画人的饒舌とは裏腹に、下世話な答えをする。

月の花挽歌 ～7. 時の過ぎ行くままに～

7-7

取ってつけたように、ラブシーンを褒められても女優は釈然としなかったけれど、Tらしい口振りだと思って納得することにした。

女優のしぐさを見て、ピンボケの受け答えをしてしまったことに気づいたTは、「あのシーンで（本当に愛しているなら、私を殺して）と原作通りのセリフを使ったのは、脚本がストレートすぎたんじゃないかな」とまた映画人らしいことを言った。

「原作に忠実すぎるから、原作を超える映画は難しいかもしれませんね。ベストセラー小説だったらなおの事ですよ」と俳優は意識の半分を使い、訳知り顔で話に加わった。

「映画はシナリオと編集が八割で、あとは製作、演出、カメラワーク、音楽……、俳優の演技力なんぞはキャスティングが作品にハマるかハマらないか次第だからね」とTは冷ややかな声で言った。

「ちょっと待ってください。大先輩のお言葉でも、役者の端くれとして私は納得できません！長年やってこられたことを卑下なさるのですか？今、言われた演技力なんぞはからのくだりの部分を撤回してください！」と俳優は眉をひそめて言った。

ひとかどの三人の俳優がナーバスな危険水域に達しようとしている場面で、今まで置いてけぼり感が漂っていた横田が忽然と登場して「ここはひとつシャンパンでも開けて、シャンシャンと手打ちにしませんか」と地口まがいの風刺言葉で座を取りなした。

綺麗に遊ぶことが常識とされる別次元の領域で、あろうことか痴情のもつれを絵画の修復師ではあるまいし、復元しようとしている画家自身の毛細血管に、これまでにない漆黒の悪寒が走るのを感じた横田は、無謀にも錬達の役者たちの中に闖入することで解消しようとした。

知人の画家の内実など知る由もない大御所俳優は、柄にもなく小戯れたセリフ回しで剣呑な雰囲気を払拭してくれた横田に投げ銭でもしたい衝動に駆られた。

客同士ならまだしも、当の本人が絡んだ揉め事までもが重なるので、今日は厄日だと半ば諦めかけていた真紀は、降ってわいたような横田の助け舟に便乗させてもらった。

「シャンパンで手打ちにすると洒落ているねー」と大御所俳優は良く通る声で言う。

「シャンパンは、お店からの気持ちとさせてください」と真紀は、さっき横田に言ったのと同じ意味の言葉を間も置かずに添えた。

月の花挽歌 ～7. 時の過ぎ行くままに～

7-8

「粋な計らいをしてくれたご両人に、心から感謝したい。嬉しいね、嬉しいだろう……」

全身を使って喜びを露わにしたTは、女優と男優を交互に見やっ、同意を促した。

バーも立て込んでいたので、バーテンダーの菜々緒に代わってマネージャーがシャンパンを手際よくサーブした。

三人の役者と一人の画家が一斉にフルート型シャンパングラスを合わせることで諍いの場面が転換したのを引き時だと見た真紀は、呼んできてもらったヒデコと入れ替わりに舞台の袖へ立ち去るように持ち場を離れた。

後を任されたヒデコが、男優の熱烈なファンにもかかわらず、それをおくびにも出さずにそつの無い接客をしていると、急に大御所俳優のTが口元をほころばせて立ち上がり、今しがた入店してきた女性客に近づいて丁寧な挨拶をしている。

『こはる』の客筋で年配の女性のごく稀だったのでヒデコが怪しんでいると、女優の眼の色が急に変わり、男優に目配せをした。

七十代の有名女優Kが花屋『フラワーベッド』の令子さんと一緒に来店した。

令子さんが『こはる』の営業時間に来たのは初めてだったし、更には大女優と連れ立ってなので、珍しく店内の空気がざわついているのが伝播してくる。

男優Tより八歳ほど年上の女優Kは、往年の名監督たちの作品に数多く出演していることもさることながら、現在は訳あって、長年住み慣れたパリと東京を行き来しつつ、主に小説やエッセイの文筆活動をしている。

来日した際は、定宿の帝国ホテルに滞在して仕事や雑用をこなした。

いつの間にか真紀も戻って、華麗を競うかの如く六人掛けの席が華やいでいる。中でも取り分けTが上機嫌ではしゃいでいる。

「Kさんとはシリーズ物でご一緒させていただいたことがあるんだよ。残念なことに、その作品一本だけなんだけどね！」とTはリズムカルに言って、Kをじっと見つめた。

老木に花の咲くように、独特な弓形の唇でKは小さく笑った。

「シャンパンのロゼを二本お願いします。私に奢らせてください」と男優が癖のあるハスキーな声で言った。

「さすがだね！」とTは目を細めて唱える。

「私からも同じブランデーを一本お願いいたします」と女優はゴールドブラウン色の口紅を塗った魅惑的な口元をほころばせて、男優に倣うように言った。